

明珠

龍泉院

参禅会会報

従容録に学ぶ（二七）

第三七則 臨濟真人

〔示衆〕

衆に示して云く、賊をもつて子となし、奴を認めて郎となす。破木杓はあにこれ先祖の髑髏ならんや。驢鞍橋はまた阿爺の下頷にあらず。土を裂き茅を分つ時、いかんが主を弁ぜん。

〔本則〕

挙す、臨濟、衆に示して云く、一無位の真人あり。〔基を安じ脚を定め了れり。〕常に汝等が面門に向かつて出入す。〔背後底、漸。〕初心もいまだ証拠せざる者は、看よ看よ。〔還つて眼を具するや。〕時に僧ありて問う、いかなるかこれ無位の真人。〔還つて語を解すや。〕濟、禅牀を下つて擒住す。〔你、更に諱む。〕この僧、擬議す。〔他の真人を鈍滞す。〕濟、托開して云く、無位の真人、これらの乾屎橛ぞ。〔大いに鉢を持し得ざるがごとし。〕



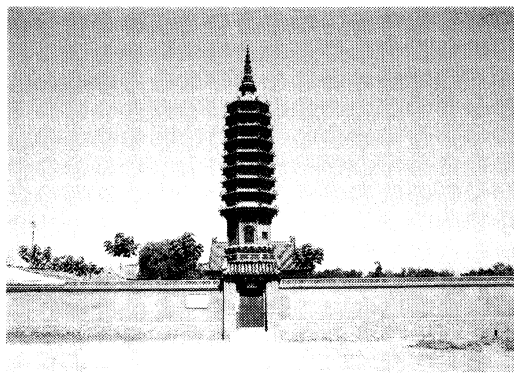
今回は臨濟宗の開祖として名高い唐末の禅哲、臨濟義玄（* 八六七）に関する本則です。『従容録』では、臨濟に関する則は、この第三七則のほか、第一三則「臨濟瞎驢」、第八六則「臨濟大悟」、第九五則「臨濟一画」の三則があり、合計四則が収められています。

義玄は山東省曹州南華の人で、出家してはじめは律や華嚴を学びました。しかし、学問では仏教の真実はえられないと禅門に投じ、黃檗山の希運に禅を学んで悟境に達し、その法を嗣ぎました。のちに鎮州（河北直隸定興）の臨濟院に住して化導をふるい、多くの門弟を打出しました。珠玉の語録『臨濟録』一卷は、かれの根源的な自由を重んじ、活き活きとした殺活自在さに充ちた禅風躍如たるものがあります。世界の名著といえるでしょう。

この「臨濟真人」の本則は、『臨濟録』の最初のほうに載っている「一無位の真人」に関する問答であり、『臨濟録』全体の中でも中心的な重要語句とされている一段です。ですから、古来禅門でも宗派をこえて皆深く参究しています。

まず、例により万松のくだした「示衆」を意識してみよう。

「ドロボウをわが子とし、お手伝いを主人とする、つぶれヒシヤクは先祖のサレコウベではないし、ロバの鞍はおやじの下あごとはちがう。一国一城の主となった時、真の主人公をどうわきまえるかな。」



現存する臨済塔

といったほどの意味です。わかるようにでむつかしいですね。

つまり、世間にはえらく間違っただことをしでかしたり、にせものをホンモノと誤っている者が多い、みな自分の主人公を忘れているからだ、といわんとしているのです。驢鞍橋はロバのくらぼねで、出っ

張っているのをオヤジの下あごに似ているというのですね。それはどうでも、万松は自分の主人公を会得することの大切さを教えているのです。

そこで「本則」をみましょう。

臨済の説法、「一人の無位の真人が、常に諸君の感覚器官から出入りしているのじゃ。新参者でまだそれが自覚できん者は、よくよく看なされ。」僧「無位の真人とはなにもですか。」臨済は椅子から降りるや、やにわに僧の胸ぐらをひつつかんだ。僧が口を開こうとするや、それを突き放し、「無位の真人が、なんとという糞かさべらだ。」

いやはや、一見すさまじいほどの教導手段ですね。しかし、唐代のすぐれた指導者には、これぐらいの硬手段はいくらでもみられます。特に臨済には、学人を応接指導するための三句・四喝・四料揀など、さまざまな禅機が伝えられる破格の大力量者だけに、こんな機縁はザラであります。のちに弘拳棒喝といわれる臨済宗特有の激しい禅風は、その開祖である臨済義玄のそれが影響しているのは、当然のことと理解されます。

さて、この「本則」の眼目は、いうまでもなく「無位の真人」で

す。もともと「真人」とは道教で説かれる理想的な人間像のことです。ところが臨済は、そんな現実ばなれした理想像などではなく、どんな飾りも地位もかなぐりすてて赤裸々となった真人間、裸一貫の生身のからだのことを、ズバリと単刀直入に「無位の真人」といったのです。なんと新鮮なひびきをもったことばでしょう。

たしかに、こんでケガをすればイタイというたしかな事実、つかれて眠くなればアクビがでるという事実、これが生身の人間の実態です。臨済は、こんなすがたこそ「無位の真人」がイキイキとほたらいている事実であり、赤裸々な実態の自己なのだから、それを徹底的に自覚せよ、それ以外に仏などない、ということです。

注意すべきは、「無位の真人」などという、それが人間の基盤だと思いきむ恐れがあります。万松がコメントで「おや、土台を作っちゃったぞ」と注意するのはそのためです。仏教は徹底して空であります。

「無位」にも注意が必要。「無位」とは見えも飾りもないことですが、それにこだわったらダメ。そこで道元禪師は、「臨済の道取する尽力は、わづかに無位真人な

りといへども、有位真人をいまだ道取せず」(説心説性)とのべ、無位へのとらわれをいましめるために、なんと「有位真人」をたてているほどです。

こんな「無位の真人」について、一僧はわからずに質問した。臨済は、この僧が自分のほかに探し求めていると見てとって、胸ぐらをつかんだ。つかむ者もつかまれる者も「真人」だぞ、という親切です。それでもわからぬ僧は何かいおうとした。万松のコメントは、「僧は真人をダメにしちまった」です。まさに、臨済のいう「こいつ、真人がどうしようもない糞かさべらになりさがったワイ」と符丁を合しています。こうまでいわれて、僧はおそらくハッと気づいたことでしょう。

臨済は有名な「随处に主となれば立処みな真なり」の語のように、人間を徹底的に自由人としてとらえているのですね。「無位の真人」も本来の自己と同じこと、自在なはたらきをする人間の根源的なちの事実です。そして、それをはなれて仏はない、ここが眼目であります。ホンモノの禅者は、人が見ていようがいまいが、ただ黙々と行持三昧するのみ。その凝縮と頭在が坐禅にはかなりません。

恩 寵

若いときからの不摂生が原因で、昭和の末に内臓を患らい、之が発端となって、数年の入、退院を繰り返して、平成三年一〇月に我が家に戻り、自宅で療養を続けることになりました。その間に腸や心臓の周りの動脈など二つも大きな手術を施して貰いました。

あとの手術は、東大医学部附属医科病院に移ったときで、その時は主執刀の教授の他、五〇人ぐらいの医師と、同人数ぐらいのナースが立ち合い、時間も五〇時間位を要した模様でありました。

その時までは心臓の動脈瘤の手術は無理ということで、手がつけられないでいたのですが、主治医の外科の教授の判断で手術が行なわれることになりました。

術後、集中管理室に入れられ、やがて退院して柏市内の病院に入院することになりました。そこで、主治医の先生が最後の回診に見えたので、ベッドの上から退院のご挨拶を申し上げた処、先生は「科学者のわたしが、こんなことを云うては、奇異に聞えるかも知れないが、今まで快復して退院される方が、よく云われる言葉に、神佛

沼南町 高間利介

のお蔭を頂いてと、先づ、云われることが多い。今度のあなたの退院も、正にその通りだと実感される。あなたが退院して快復したら、きつと事業のことに専念しようと思うが、これから神佛の加護に報恩することを第一に考えて、更生して下さい。」こう云われて端なくも、わたしには未だその気も起きていないのに気がつきました。

仕事の方は、伴たちが家内をたてて、やってくれておりましたので、わたしはこれを機会に、仕事の方は一切伴たちに送りしました。報恩、報恩と云つても、思うだけでなかなか態度や心づかいに出て参りませんが、それでもハッと思う日がよくあり、今日この病気を頂いたことを、神佛に謝する日があります。

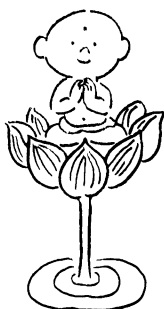
次に、訪ねて見える方が、よく死の事を云われます。「死ぬ思いをしたことがなかったか」とか、「死を怖れたことはなかったか」とか。身体が衰弱していた為でしょうか、そういう思いをしたことは、ありませんでした。だけど、こんな思いをした事がありました。或る夜、自分は今夜は死ぬかも知れない。思はぬ命を頂いてきた。だけど、誰にも会えないかもしれない。そう思いつついつしか寝込んでしまいました。

夜なか、ふと気がつくと、失禁してしまったような気がしました。枕頭のベルを押しましたら、未だ若いナースがわたしのそばに来てくれました。わたしは粗相をしてしまったかも知れないと告げると、彼女は黙って寝具を取り換え、わたしの棚から下着を取り出し取替えてくれ、笑みを浮べて帰っていききました。わたしは気をとり直し、また寝込んでしまったようです。

いっきとがたつて目をあけると、病室の外が明るくなっているではありませんか。わたしは、オヤ、明るくなって来た。死ななかったのかも知れぬ。そう思ってその朝を迎えた気が致します。死なないで済みました。

あとで、聞いたところによると、彼女の祖父が永らく病んだ事があるそうです。「そのわたしも看護婦になりたい。」と決意したそうです。その後、本を読むと、若い人が、最後になると苦しむそうです。年輩者になると已に多くの友なり家族の最後に出合っているのです、その様なことは無いそうです。実はわたしも未だ分りませんが、「生死を明らかにする」という哲学だけは、これからも勉強していきたいと思っています。

「挫折あってこそ、更生ということが判る」これを恩寵と云うのだそうです。



「みんな見ている」

柏市 高野 千代子

ちゃんとみている

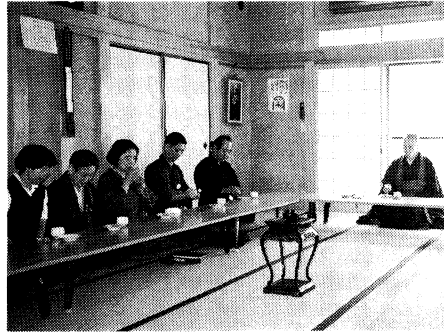
みつを

坐禅を終りご提唱をいただくために観音堂のお部屋に入ると、まづ目に入るのが
かんのんさまが、みている
ほとけさまが、みている
みんなみている

と書かれ、かわいい仏様が合掌されているお姿です。私が最初にこの一枚の書画を拝見したとき、ドキンという大変大げさに聞こえ

ますが、本当、本当と、大きくうなずくと共に、ドキンと胸を突かれました。それに、「ちゃんとみている」よとだめ押しされている所がいいではありませんか、早速ご老師におねだりして、一枚いただいて帰りました。今、我が家には白木の額に入って部屋の一隅にかけてあります。

思えば、六〇余年生かされてい



一泊参禅会風景

ながら、私のすべての生きざまをちゃんと見ておられるお方のいることをとすると忘れ、我執のとりこになり、右往、左往して送ってきた来し方を振り返っておりま

茶の間の中で押し寄せてきて有難いやら、悲しいやら、人の世の無常を知らされます。どうしてもうしてと、考えさせられるうちに、その情報はいつの間にか消えうせ、次から、次へと新しい情報の渦の中に生活させられている毎日です。そんな中で、今を一人で生きる私を支えてくれているのが「仏達は、

脚下照顧の一泊参禅会

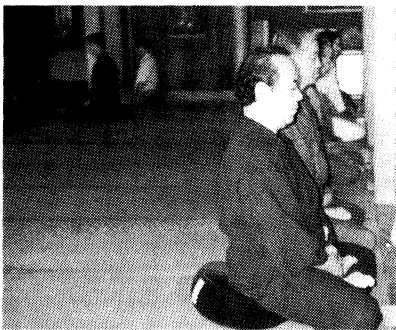
一泊参禅会は例年他所にその場を求めておりました。第八回目の今年は、昨年七月に改築された観音堂（大悲殿）を使用させていただいて、六月一二日（土）～一三日（日）の二日間、私たちの修行道場である龍泉院で行われました。椎名老師より、平素と同じ修行の場での一泊参禅会故、その気安さから安逸にならないように、場所とか時期とか一切関係なく自身の問題であることをしっかりと認識し、気持ちを引き締め、終ったあと本当によかったと思える坐禅会であってほしいとの開講のお言葉を頂戴して開始となりました。今年の一泊参禅会は、次の差足のもとに行われました。

みんなみているよ」というこの言葉です。みんなみられているんだよ、そしてちゃんとみているよ、だから、あるがままを受けとめて、悩むなかれと、自分に言い聞かせ一日の終りの床の中で全身の力をぬいて、おまかせする葉ちんを想像してねむりにつきます。

六月一二日（土）
上 山 午後二時
開講式 午後二時二〇分
坐 禅 午後三時
提 唱 午後三時四〇分
葉 石 午後五時
坐 禅 午後七時
坐 禅 午後八時
開 枕 午後九時
六月一三日（日）
振 鈴 午前四時
坐 禅 午前四時二〇分
行 茶 午前五時
坐 禅 午前五時三〇分
朝 課 午前六時一五分
作務・小食 午前六時四〇分
坐 禅 午前八時三〇分
提 唱 午前九時一〇分
行 茶 午前一〇時三〇分

坐 禅 午前一〇時五〇分
中 食 午前一一時四〇分
解 散 一二時四〇分
椎名老師の提唱は、一昨年、昨年に続いて「典座教訓」で、一段々「一七段迄」意日通夜、物来りて心に在り、心帰して物に在らしめ、一等に佗と精勤弁通す。」材料や器に心を注ぎ、物の命と自分の命とに別け隔てない状態のとき、物の命を活かすことになる。等、調理する基本、調理する心構えを説かれ、また炊事、掃除という作業を修行とするところに救いがあり、喜びがあるとお教えいただきました。

行茶は、緩急の緩のとき。幹事



一泊参禅会風景

の小畑様が、中国より持参された最高級の福建省鉄観茶を、しみじ

龍泉院一泊参禅会



椎名老師
 ▲参加者▼
 小畑 節朗
 寺田 哲朗
 徳山 浩
 中嶋 宏誠
 安本小太郎
 五十嵐嗣郎
 下村 忠男
 添田 昌弘
 宮田 哲男
 佐藤 初恵
 井之輪 進
 佐々木秀子
 宮本 茂
 今泉 章利
 今泉 房子
 杉浦上太郎
 (一六名)

みと味わさせていただきました。

また、小食は椎名老師の奥様が整えてくださいました玄米の小豆粥。殆どの会友さんがおかわりをする程大好評でした。いつも陰で暖かい心配りをしてくださっている奥様に改めて感謝申し上げます。

七柱の坐禅を終え、中食後の茶話会で、椎名老師より今回参加したくてもできなかった会友さんが沢山いらったことに思いを馳せること。宗教は行、また行によって宗教は本物になる。七柱全て坐られた最年長の佐藤初恵さんは大変素晴らしい、若い人はお手本にしてほしい。自己反省の伴った行でなければならぬ等々のお言葉をいただいて散会となりました。

今年は、馴れ親しんだ龍泉院での特別な思いの一泊参禅会でしたが、「しっかり坐る！」深閑とした禅堂（本堂）一杯に響きわたる椎名老師の一大喝がありました。行の場に親しみの思いをもって、修行時は常に一期一会、真剣に打ち込むことの大切さを、この大い喝を通してお教えくださったのだと心に刻み込みました。

最後に、椎名老師、小畑幹事、中嶋、宮本年番幹事各位に心より厚くお礼申し上げます。

一泊参禅会と私

沼南町 佐藤 初 恵

私が初めて一泊参禅会に参加させていただいたのは最乗寺でした。皆様とお会いしてからの日も浅く、

坐禅の経験とてない私は不安と持病の低血圧が一緒になって、吐き気と目まいにおそれ帰りには飯事も喉を通らなくなり、高名な中川先生に脈をとっていただいた忘れられぬ思い出を持っております。

大雄寺の時には何より萱の屋根々々に圧巻されましたし、御住職と若和尚様の役割りのバランスに感じ一期一会の教訓をいただいて帰宅しました。

常真寺では皆川御老師から「生死死ぬ事は永遠の命を伝える重大な使命」と言う目の醒める様な人生航路の法話をいただき一生忘れられない思い出となりました。その様な佛の道を学ばんと志す私達に、椎名御老師は応量器を扱っての本格的な食事作法をお教え下さいました。又其の中味の重厚な心の込められた御馳走の数々。四季折々の庭や山の時節々々の品々を、常に心配りて保存し置く心の豊かさ、暖かさのこもった朝夕のおもてなしは忘れられない思い出です。

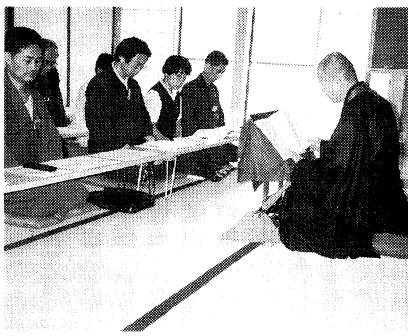
二回目の常真寺は坐禅より先に

小川の流れと応量器でいただく寺族様方の心遣いが待たれる様な本当に楽しい参禅会でした。

総持寺での参禅会は丁度膝の関節が痛んでた時なので、始めから二炷休ませていただきました。坐禅堂から帰りの節、東ご老師はかならず無理は本意ではないゆくり休んでなさいとのお言葉を、二度も頂いて感激致しました。東ご老師の御法話の中であるアメリカ婦人が、神に祈ってるのではなく、神が私共の為に祈って下さるのを聞いてるとのくだりに、なんと深い信心の心の持主なのだろうと感銘しました事、低頭とお声を何回かけて下さった思い出が今も残っております。又蝶々の飛ぶ如く黒と白のコントラストの衣をひるがえして経本を運ぶ小僧さん方の優美さに、陰の努力を思っ私の目頭は熱くなりました。

今年は龍泉院の観音堂を道場として行われました。案内状を手にした時四十分坐禅が七炷も組まれておりましたが、自分の檀那寺だから出来る所までと簡単に一人で割切って安心しておりました。しかし其の一ヶ月位前にすごい

腸カタルを起して入院し、点滴によってようやく三週間位いで良くなりましたが、体力的にも自信がもてる状態ではありませんでした。そこでまづ夜は帰宅するからおふとんだけはお断りしていただくこうと思ひ龍泉院様にお電話致しましたら、御老師様が簡単に「そんな心配しないでいつでもお休みしていいのですから安心して」と言われ、そうですかと何んのためらいもなく参加させていただきました。その結果は身心共になんの無理もなく本当にワキアイアイの中に諸行事と七炷の坐禅が完了したの



一泊参禅会風景

です。

お食事、お茶、作務、寝具のおかたづけ等一切の事は役職の方々、寺族様方皆様のお陰様に寄るもので、私は唯々お客坐禅をさせて

いただいた様なもので本当に有難う御座居ました。

七炷目を終って最後のお茶会に移るべく観音堂に戻って座った時、私は全身がすごく軽く、自分自分の体が透き通った様なふわっと虚脱感に浸った時、御老師様が「御苦労様大丈夫ですか」とのお声をかけて下さったのですがハイと御返事申上げるすべしかなかったのです。それ以上の事を言うとは涙がふきこぼれて、今浸ってる此の空か虚がこわれてしまう様な気持ちでしたのです。

お茶会が始まりようやく落着き、中国茶を三杯もいただきました。

一泊参禅会は私なりに重ねて六回目になりました。坐禅の後なんにも考えぬ素直な気持ちになれたのは、やはり檀那寺の故でしょうかと思っております。

本当に年を重ねた今、こんなすばらしい御因縁をいただかせて貰った事に深く感銘し乍ら来年の事を楽しみにしてる今日此の頃です。

窓あけて 空を見上ぐれば
今日の雲 いづこの国を
おとづれきしか



自業自得

柏市 安本 小太郎

生活の中の佛教でなく、佛教の中の生活をする事の困難さを思う、この頃です。

自分に都合の悪い事があると、親の遺伝だからと考えます。しかし、その親を選んで生まれたのは自分であり、自業自得の自覚が出来ていないと再三思い当ります。

業。身語意の三業により、日々の生活が為されて居りますが、その行為は第八識に熏習されて、生々世々を生き続け、縁が熟せば、再び、善悪無記の業として、私を行動させ、その結果を又、第八識に熏習して行きます。

無始の時よりこのかた、熏習された種子は第八識の中で前の種子が消えれば、又同じ種子を生じて生き続け、かくして、無数の種子が、第八識に存在しております。

物心ついてより、五〇有余年を振り返っても、自分にとって大小様々な事があり、喜び、悲しみ、悩んだのですが、今はあら方、第六識上に浮んでは来ませんが、第八識には、ちゃんと種子として、生きていると、佛教は言います。

今年の夏は、沢山の蚊を殺しましたが、さ程悪い事をしたという

思いがありません。これも、過去に於て、多くの殺生をくり返して、大して悪い事とも、以後止めようとも思わなかった種子を熏習し、それが、蚊を見つけた所縁により現行したのに他なりません。

殺された蚊は蚊に生れ、血を食として生きなければならぬ業報であり、殺した自分は殺生戒を犯して平気な種子を、又熏習して、その結果は三時のどれかの生に長時の苦を受けるのですが、その自覚も薄いのです。

どうして、こうゆう事になるのでしょうか。生有、本有、死有、中有のくり返しに於て死有の苦悶で本有の第六識の記憶を失い、生有の苦悶により中有の記憶を失いて、前生の記憶は第六識には生じないのだそうです。だが、第八識には種子として、しっかり残っており、これが今生に於て、全く心当りのない事が起って来る自業自得の仕組みであると、唯識論にはあります。これも頭ではある程度納得出来るのですが、本物になっていません。

第八識の種子は無限ですから、日々の生活で、諸悪莫作、衆善奉

仕を少しでも努め、悪の種子の現行を伏し、更に断ずべく、坐禅に

親しみ、仏祖の教えを証解するよう精進したいと思います。

「おせがき」の裏方雑感

柏市 五十嵐 嗣郎

八月の天候不順は旧盆に入っても一向に回復せず、例年になく涼しい「おせがき」でした。昨年の「おせがき」のお手伝をなされた今泉さんの感想文によれば「本堂の中は蒸風呂。(省略)中ではよく誰れも倒れないものだ。」と述べられていましたが、今年は風通しのよい所に座っていると風邪を引くのではないかと思うほど、涼しさを通り過ぎて寒いほどでした。

さて、「おせがき」は曹洞宗の寺院にとつては年間で最も盛大な法要であり、今目的に言えば一大イベントと呼ぶこともできます。ご老師にはお世話になりっぱなしで、何かお役に立つことがあれば埋め合わせをしなければと思いが、今年の「おせがき」に夏休みを合わせるよう職権を乱用しました。

当日お手伝に参集されたのは小畑、高野、中嶋、安本、杉浦、武



一泊参禅会風景

田、小沼の各氏です。

お手伝いの内容は本堂の掃除に始まり、飾り付け、お茶のサービス、座蒲団敷き、卒塔婆の運び出し等、丁度イベント会場をセッティングする裏方さんにあたります。因に当日のスタッフを私流にご紹介しますと、イベント（法要）の規格・構成・脚本・プロデュース・監督兼主演が椎名老師、特別出演として中野東禅老師、大洞院の木村老師他ご随喜のご住職方々の友情出演、小畑氏は受付兼会計、杉浦氏は昨年の経験から本堂舞台制作のフロアディレクター、武田氏は本職柄、掛軸などの美術係、中畠氏も工事現場に強い所から、五色幕を天井の高い所に張る作業の安全管理係、高野氏は接遇係、安本・小沼両氏と小生は道具係という所です。

舞台制作（本堂の飾り付け）の仕方については、今泉氏が明珠（No.16）に詳しく述べられていますので省略しますが、作業時間は約一時間半ほどでした。しかし、制作途中で昨年の経験者も作業手順を一部忘れたり、セッティングの位置を迷ったりして、ご老師の指示をいただく機会も度度ありました。そのような際には、つい指示書や作業マニュアルがあればと

思ってしまうのですが、これは現代ビジネスマンの習性かもしれない。

一一時頃に早い昼食のお弁当をいただき、車でこられる方々の誘導にあたるのですが、駐車場はすぐに満車となり順次門前の通路や畑の中の農道にまで誘導することになりました。続々と檀家の方々の車が増え、このままでは駐車する場所がなくなるのではないかと心配するほどでした。

一時から中野東禅老師の法話が始まるので本堂の方に伺うと、もう座る余地がないほど多勢の方々がおいえになっており、入口付近にからうじて席を確保することができました。

中野老師のお話しは「六方礼経」を基にした「釈尊の人間関係学」というタイトルでした。

お釈迦様は人間関係の内でも、父母と子のあり方、師と弟子のあり方、夫婦のあり方、友人関係のあり方、上司と部下のあり方、聖者と衆生のあり方の6つについて説かれておられ、この6つの関係はいつの時代でも大切な人間関係の基本となるものです。

この教えの中に、例えば夫の妻に対する態度の一つに「装身具を与えること」を説かれています。

これは世の男性共に評判の悪い、結婚一〇年目にスイートテンダイヤモンドを贈るテレビ広告の様に、奥様の機嫌をとるのではなく、「女が身一つでも生きていけるだけの貴金属類を与えておきなさい」という教えだということでした。

現代におきかえると、奥様には何か一つ手に職を持てるだけの投資をしなさいと解釈できるかもしれませんが。因みに帰宅後、家内に東禅老師のレジメを見せると、すぐにこの箇所に対応して（実は小生もきつと来るとは思っていました）が、「仏様もいいことおっしゃるのね、だからネックレスの安いのでいいから一つ買ってもいい」とおっしゃってました。

中野東禅老師の法話は歯切れがよく、平易なお言葉で実にわかりやすく、しかも奥深いものでした。素晴らしい、心洗われるお話しを聞

くことのできる龍泉院の檀家の方々は本当に幸わせたなと末席で聞きながら思いました。だからこそ毎年多勢の方々がおいえになるのかもしれません（勿論、椎名老師の日頃からの檀家さんへの心くばりや役員さんのお世話があつてのことですが）。

「おせがき」のお手伝いをさせていたがきながら、来年の「おせがき」は家内やできれば子供達にも中野東禅老師のお話しを聞かせて、少しは人生いかに生くべきかを考える機会にさせたいと思った次第です。本来は父親は子供に生き方の基本を話し、姿勢を見せる役割を果さなければならぬとは充分わきままえていたのですが、まだまだ修行が足りず、家庭の内でもやはり裏方をやっているのが実状です。なさけない！



香道と坐禅

柏市 今泉 房子

床の間には満々とした月に芒の軸が掛かっております。静かに襖の戸が開かれ、香元（香を炷き出す人）と執筆（会の記録を書く人）が各々道具を持ち席入り致します。

席中には緊張した空気が満ちており、そんな中で次々と香道具が点前座で並べられ、香炉の灰の上に乗せられた銀葉の上にわずか一分ほどに割られた香木が置かれます。この頃になりますと御安座の声がかかり、ゆったりとした雰囲気となります。その間に執筆はその日の会記を書きはじめ、これから行なわれる組香の説明を次のように致します。「本日は月見香を致します。「月」という香をお試し致しますのでよく憶えておいて下さい。」といった全員に「月」のかおりのする香炉を廻します。

香席では「月」の香と「月」とは異なる香（これを「ウ」と言います。）を打ち交ぜて、三包みを香名を伏せて炷き出します。客はその香名を当てるべく出た順に答えを書きます。一番目、二番目、三番目の香がいずれも月月月と思えば、これを「十五夜」と表現して答える紙に書きます。又、月月ウ

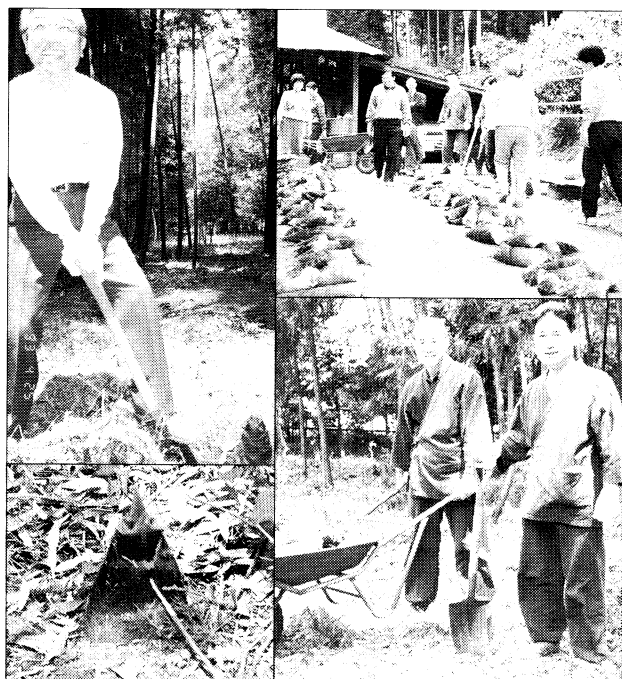
なら「待宵」、ウ月月なれば「十六夜」、月ウ月なれば「水上月」、ウ月ウなれば「木間月」、月ウウなれば「夕月夜」、ウウウなれば「雨夜」、ウウ月なら「有明」というように、お月さまの一時、一時の姿に名を付け、席中にて幽玄の世界を楽しむのです。正解が読み上げられますと、それぞれの点数が会記に書かれ、その日の最高点のひとに御ほうびとして、会記が贈られ、席中の皆様からの「おめでとうございます。」の声を聞きながらなごやかに会が終了致します。

これは、九月におこなわれた香席の様子ですが、香の起源は日本書記によると、推古天皇三年（五九五年）に香木「沈水」が淡路島に漂着した時とされており、五三八年の仏教の伝来と時を同じくして、仏教儀式と一体になって香がひろがっていったと考えられます。政治の儀式の中では、供香として用いられ更に清め、穢れをとる為の空香となりました。一方、貴族の世界では、薫物として練香が用いられ香のある暮らしが源氏物語の世界に書かれています。その後、

足利時代、三條西実隆の歌道と深くかわり、現在行なわれているような香木をたく組香とした香道が茶道、華道と同時代に成立致し、江戸時代の隆盛期を経て現在に至っております。

香は聞くと言います。心で聞くことを指していると思われれます。香道の極意はと尋ねたことがあります。曰く「当てようという執着を持たず、素直な心で聞くことです。」との答えを頂き、一瞬にし

て消えてゆく香りに無心でぶつかること、普勸坐禅儀にある「諸縁を放捨し万事を休息して、善悪を思わず、是非を管すること莫れ」のことが浮かび―まさに坐禅そのものだと思われました。当たるもよし、当たらずとも―香炉を捧げ感謝し、香を深く吸い込み、香三昧の席中の人となる時、私にとって仏の世界が広がって来るような気がいたしております。



無心で筍掘り（龍泉院裏山にて）

龍泉院参禅会簡介

一、日時 毎月第四日曜午前九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）

一、坐禅 止 静 鐘 三声 坐禅

経行 鐘 二声 経行

放禅 鐘 一声 放禅

一、講義 木版三通 開経偈を唱えて「正法眼蔵」の提唱を聞く

講師 龍泉院住職 椎名宏雄老師

平成五年七月より「無情說法」の巻を提唱

一、座談 自己紹介の後、茶を喫し座談

正午解散

一、参加資格 年齢、性別を問わずどなたでも参加できます。

一、会費 無料

一、成道会坐禅

月例参禅会の他に毎年一二月の第一あるいは第二

日曜。（本年は一二月五日）

釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要の後、法話を聴聞、点心（昼食）を共にする。

沼南雑記

〔参禅会記録〕（ ）中は座談の司会者。

・四月二五日 二二名

（青木志郎氏）

裏山にて恒例の筍掘り。

・五月二三日 二一名

（五十嵐嗣郎氏）

・六月二二日～二三日

一泊参禅会 一六名

於天徳山龍泉院

幹事 中嶋宏誠氏

〃 宮本 茂氏

・六月二七日 二二名

（加藤健之氏）

・七月二五日 二三名

（高野千代子氏）

・八月一六日

龍泉院おせがき大法要に、参禅会を代表して、小畑幹事以下八名が作務奉仕をさせていただく。

法話 中野東禅老師

・八月二二日 二二名

（寺田健二氏）

・九月二五日 二五名

（添田昌弘氏）

▼四月の参禅会后、龍泉院裏山で筍掘り。毎年々々感謝で筍賞味。

▼五月三十一日～六月六日迄の日程

で、曹洞宗千葉県宗務所主催「第五次中国仏教史蹟参拝」ツ

アーが実施され、当参禅会からは椎名老師と小畑幹事が参加されました。椎名老師よりお土産に数珠を頂戴しました。深謝。

▼一泊参禅会の「行茶」のとき、小畑幹事が中国より重い錫の壺入りの観音茶を持ち帰られ、更には本格的作法でお茶を入れてくださいました。美味に謝々。

▼今年七月に発生した北海道南西沖大地震で多くの犠牲者と被害が出ました。龍泉院でも七月の月例参禅会と、八月一六日のおせがき大法要の両日、義援金の募金活動が行なわれました。犠牲者のご冥福と被災された方々の今後の健闘をお祈りします。

▼八月一六日の龍泉院のおせがき大法要は、仏教活動の真髄を拝する想いで一杯。中野東禅老師の法話、椎名老師の説教を通して、正しい人間としての生き方を深く認識する。龍泉院にご縁をいただいた檀家、私共参禅会員の幸せを、また改めて想う。

▼当参禅会の代表、高間様より原稿をお寄せいただきました。大変しつかりしたご筆蹟からも本復されたことを充分感じさせていただきました。尚一層のご健康を祈念いたしております。（杉風記）